人口問題研究（J. of Population Problems）72－4（2016. 12）pp. 387～396

研究活動報告

アジア研究学会　2016年京都大会

2016年6月24日から27日にかけて，京都・同志社大学にてアジア研究学会（AAS-in-ASIA 2016 Kyoto）が開催された．AAS とは Association for Asian Studies の略である．ホームページによると，AAS はアジアの国・地域を対象とした人文・社会科学系の非営利学術団体で，全世界に1万以上の会員をもつという．AAS のアジア大会（AAS-in-ASIA）は，毎年北米地域で開催される AAS 年次大会のスピンオフといった位置づけで，アジアからの参加者の増加を受けて始まった新しい試みとのことである．AAS-in-ASIA は，2014年より“Asia in Motion”というテーマの下に開催されており（2014年：シンガポール，2015年：台北），今回の京都大会はその3年目にあたる．筆者は知り合いからの参加依頼を通じてはじめて AAS のことを知り，今回参加することとなった．

対象とする学問領域が広いこともあり，プログラムをみると，サブカルチャーや文学，芸術，歴史，心理学やイデオロギーなど，普段なじみのないテーマのセッションも多かった．そのため，実際に自分の研究に直接に関連のあるセッションの数は限られているように思われた．しかし，家族研究は AAS の中でも中心的な一角を占めているようであり，国内外から多くの家族・人口研究者が参加していた．筆者は，Marriage Strategies in East Asia というパネル（組織者：D. Davis イェール大学教授）で，“Projection of Marriage Markets in East Asia”（A. Esteve, J. Garcia-Roman, R. Kashyap, Y-H A. Cheng, N. Wanli との共同研究）というタイトルの口頭報告を行った．ふたを開けてみれば，このパネルの報告者は全員人口学者か計量社会学者で，共通の知り合いも多く，すぐに打ち解けることができた．また，今大会にはハーバード大学の Mary Brinton 教授，デューク大学の Anne Allison 教授をはじめとする日本社会研究の著名研究者や，シンガポール国立大学のアジア人口研究センター所長の Wei-Jun Jean Yeung 教授，ジェンダー・労働経済学をご専門とされている大沢真知子教授（日本女子大学）や永瀬伸子教授（お茶の水女子大学）など，人口や家族に関心をもつ様々な分野の研究者が参加されていた．ただ，これらの研究者の報告セッションと我々のセッションが同じ時間帯に行われたため，お互いに近い研究関心を持ちながらも，両者がセッションを通じて意見を交わす機会をもてなかったことは残念であった．しかしながら，普段接するのとは異なる研究者との交流は刺激的でもあり，新たなネットワークや気づきを得るうえで有用であった．AAS-in-ASIA の次回開催は韓国・ソウルで2017年6月24-27日とのことである．　（福田節也　記）

第38回国際生活時間研究学会　ソウル国立大学

2016年7月19日から22日にかけて，韓国・ソウルのソウル国立大学にて，第38回国際生活時間研究学会（The 38th IATUR（International Association for Time Use Research）Conference）が開催された．同学会は，生活時間調査の研究，分析手法，データ収集方法等について研究者および実務者間で意見交換を行うことを目的として設立された国際的な学術団体である．今大会はその38回目となる年次大会であり，「生活時間研究における新たな挑戦：ウェルビーイングと社会政策（New Challenges in Time Use: Wellbeing and Social Policy）」とのテーマに基づき，家計の行動や社会政策に関わる様々な研究報告と議論が行われた．また，会の前日には，生活時間調査を用いた応用的

な分析手法を学ぶためのワークショップセミナーが行われた．筆者は近年，生活時間調査を用いた分析の機会が増えてきたことから，前日のワークショップから参加した．

学会では，テーマや関心の異なる様々な研究報告が行われた．筆者は主に，ジェンダーと家族生活との関連に関心があったため，これに関係するセッションを中心に回った．また，自身は Women's Work and Work-Life Balance のセッションで，“Counting Women's Work in Japan”と題する口頭報告を行った．会期中，午後の最初のセッションは Keynote Lecture と題して，当該分野の著名研究者による講演にあてられており，生活時間研究の先端に触れることができた．今回はじめて参加した学会であったが，参加者同士の距離感が近く，交流の機会も多く設けられていたため，非常にアットホームな印象を受けた．生活時間データは，2015年に国連で採択された「持続可能な開発目標（SDGs）」の成果指標として採用される等，近年，政策や研究における利用が進んでいる．個人的には，今後も機会があればフォローしていきたい学会の１つであると感じた．次回は2017年７月19-21日，スペイン・マドリッドでの開催とのことである．（福田節也　記）

フィリピン人口登録ワークショップ

2016年８月23日（火）から25日（木）にかけて，フィリピン・イロイロにて開催されたフィリピン人口登録ワークショップ（8th National Workshop on Civil Registration）にオブザーバーとして参加した．人口登録，つまり日本でいうところの出生・死亡・結婚・離婚登録は，多くの中・低所得国でいまだ全数登録されるに至っておらず，少なくとも出生を全数登録を行うことは，昨年に国連で採択された持続可能な開発目標（SDGs）の目標16に明記されており，現在各国で制度の拡充が進められているところである．フィリピンでは市町村レベルに１人，国家公務員である人口登録官（Civil Registrar）が国家公務員として配置され，２年に１回，全国の人口登録官が一堂に会して，最新の情勢・法制度を周知するためのワークショップが開催されているが，今回はその第８回目に当たる．ワークショップは，人口登録の担当省庁であるフィリピン統計局の主催であるが，法務省，外務省，教育省，社会福祉開発省といった関係省庁も参画している．フィリピンの出生登録はセンサスによれば，2000年の88.2%から2010年の93.5%まで上昇しており，2030年までの全数登録達成が期待される．（林　玲子　記）

東アジア・アセアン経済研究センター（ERIA）「東アジアにおける国際人口移動と開発」第２回ワークショップ

2016年８月26日（金），タイ・バンコクの Grande Centre Point Hotel 会議室にて，東アジア・アセアン経済研究センター（ERIA）が主催する「東アジアにおける国際人口移動と開発」第２回ワークショップが開催された．このワークショップは，2016年４月にジャカルタで開催された第１回会合に引き続いて開催されたものであり，当研究所からは，国際関係部長林玲子，同第二室長小島克久，同研究員中川雅貴の３名が参加した．前回と同様に ASEAN 域外から唯一の参加となった日本の研究チームのほか，タイ，マレーシア，インドネシア，ベトナムの各国で組織されているプロジェクトチームの参加者が，それぞれのプロジェクトの中間発表および進捗状況の報告を行った．日本の研究チームによる「グローバル・エイジング時代のケア人材の国際移動」に関する研究の中間発表に対しては，日本国内におけるケア需要の将来動向ならびに充足状況が，アジア・太平洋地域におけるケア